

有珠山見学印象記

(株)畑村創造工学研究所

代表 畑村洋太郎

見学日：2008年10月20日(月)～21日(火)，両日とも晴れ

見学先：有珠山 2000 年噴火口周辺(北海道 虻田郡洞爺湖町 洞爺湖温泉)

手配および案内：環境防災総合政策研究機構 理事 岡田 弘先生

記録日：2008 年 11 月 12 日(水)，19 日(水)

行程：

2008年10月20日(月)

8:30 羽田空港 発 JAL509便
10:00 新千歳空港 着 レンタカーにて移動
12:00 伊達消防署・防災センター
12:40～13:50 伊達市のすし屋「文七」にて昼食
14:00 噴石を浴びた洞爺湖幼稚園
15:00 旧国道230号線グラブベン，階段断層
16:35 西山山麓火口散策路
17:00 展望台
17:20 洞爺湖万世閣着
18:30 夕食 兼 懇親会

2008 年 10 月 21 日(火)

8:00 宿泊ホテル 出発
8:30～9:20 壮瞥町役場にて山中町長にインタビュー
9:30 岡田先生動画視聴@壮瞥情報館 i (アイ)
10:30 倒壊病院見学
11:00 展望台，2000 年火口群，2000 年金比羅火口災害遺構(温泉施設，アパート)
12:30 洞爺湖ビジターセンター
13:00 昼食
14:20 昭和新山，大有珠山頂
15:20～16:00 三松正夫記念館
18:10 新千歳空港着 夕食
18:49 新千歳駅発
19:25 札幌着，札幌グランドホテル泊。

1. 見学の目的

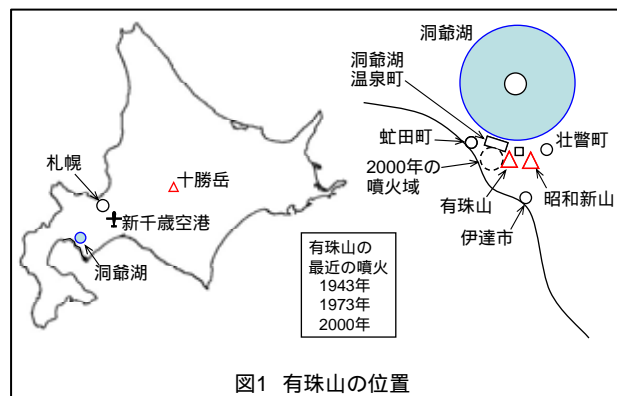
有珠山を見学した際に案内してくれたのは北海道大学名誉教授・岡田弘先生である。2000年の有珠山噴火の際、岡田先生が自治体に噴火の切迫性や危険性等の情報を伝え、首長達がタイムリーに避難勧告を出したお陰で、周辺住民が事前に避難し、噴火の際の死傷者がゼロだった。

岡田先生は有珠山の噴火を予知しただけでなく、火山活動が静穏な時期から地元に着した住民への啓発活動を行っていたために、住民が理解して勧告に従い、避難が速やかに行われた。また、岡田先生は自治体などの防災機関と常に連携した活動をして、噴火時の防災対策や避難解除、復興時の安全な町作り等についての的確な助言をした。

有珠山を訪れた目的はそのハザードマップはどのようなもので、現地の状況がどうなっているのかを知ることと、岡田先生に直接話を聞くことである。10月20日～21日の2日間現地を案内してもらう間に、岡田先生の考え方を十分学ぶことができた。

2. 場所

有珠山は北海道の洞爺湖の南側にある(図1)。有珠山の噴火では、有珠山東側にある壮瞥町の町長や虻田町町長は大きな被害となった過去の十勝岳や雲仙岳の噴火を考え、行政は何をすべきか考えた上で、日ごろから地域住民に信頼されている岡田先生の助言を活用し、ハザードマップに従って危険区域の住民避難を決断した。



参考までに、十勝岳は北海道のほぼ中心にある。十勝岳では大正時代(1926年)に大規模な噴火が発生し、発生した泥流で144名の死傷者・行方不明者を出した。その後も十勝岳は1962年に噴火し、死傷者・行方不明者を出している。(岡田先生は道内5火山の噴火予知研究に従事し、1988～1989年の十勝岳噴火で噴火時の社会対応について実戦で学ぶ機会があったという。)

洞爺湖の中ほどにある島は中島という。また、サミットが行われたザ・ウインザーホテル洞爺は洞爺湖西岸の山の上にある。図中破線で示したのが2000年に噴火した地域である。

3. 見学(行程順に)

昼食

2008年10月20日(月)に東京から新千歳空港に向かい、そこからレンタカーで有珠山に向かった。その途中、伊達市のすし屋「文七」で昼食をとった(写真1～3)。海鮮丼がとても美味だった(写真4)。

洞爺湖幼稚園

写真5は噴火の際におびたしい噴石が降り、そのままの状態で見学されている“洞爺湖幼稚園”である。現在、幼稚園は別の安全な場所に移転している。ここではこのように噴火で壊



2008/10/20撮影

写真1 伊達市のすし屋「文七」での昼食



2008/10/20撮影

写真2 「文七」での昼食の席で説明する筆者



岡田先生

2008/10/20畑村撮影

写真3 「文七」での昼食



2008/10/20畑村撮影

写真4 「文七」の海鮮丼(とびきりうまかった.)



2008/10/20畑村撮影

写真5 噴石で満身創痕の洞爺湖幼稚園



2008/10/20畑村撮影

写真6 洞爺湖幼稚園の建物に突きささった噴石

れたものを災害遺構として保存している。写真6の建物の壁に突き刺さった大きな噴石をみると噴火のエネルギーがよくわかる。園庭にある池(写真7)はもともと平らだったが、噴火活動の際に地面が隆起したために傾いた。写真8は旧国道側にある幼稚園の柵であるが、右側の柵は噴火前からあるもので、もともとは垂直に立っていたが、地面が隆起したために傾いてしまったものである。左側の柵は噴火後に設置されたものである。これらの傾きの変化を見ると、大地がどのように動いたかがとてもよく分かる。

西山山麓散策路

西山山麓を岡田先生の案内で歩き回った。

写真9の道路は旧国道230号線である。元々は緩やかな下り坂の道路で、写真奥に見える上り坂はなかった。マグマが上昇して潜在ドームとなり、地盤が隆起したものである。中ほどの窪みに水が溜まり池になった。私が訪れたときは水はほとんどなかったが、一時はもっと深かったそうだ。横に見える建物は元々消防署だったが、現在は展示や休憩に使われている。

写真10の町道泉公園線は地面の隆起によって階段状になった。図2に示すように、地面がマグマの隆起によって押し上げられたときに割れて、真ん中がストンと落ちる(これをグラベン(地溝)という)。また、マグマが上昇して地面が割れて、中央が落ちる。これが繰り返されて地面が階段状になる。このグラベンの起ったところを歩いた。大きな段差が次々と連なっている。

写真11は一連の噴火とそれに伴う地殻変動で壊れたお菓子の工場である。「ジオパーク」という考えがあり、ユネスコの世界ジオパークでは『地質学的重要性だけでなく、考古学的・生態学的もしくは文化的な価値もある1ないしそれ以上のサイトを含む地域』であると定義



写真7 噴火の際の地殻変動で傾いた池
長さ約5mの池が約30cm傾いている。



写真8 洞爺湖幼稚園の裏の旧国道での柵。
右が噴火前、左が噴火後。縦の柱の開き方で
地表の傾きの変化がわかる。約1/10位に見えた。



写真9 西山山麓火口群と旧230号線



写真10 町道泉公園線 (写真向うが隆起し、手前がずれ落ちたので、道が階段状になった。)

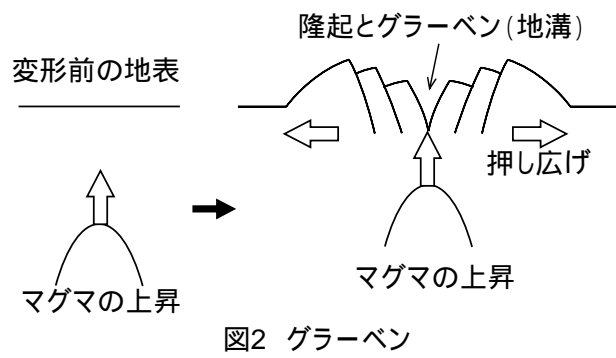


写真11 噴火でつぶされたお菓子の工場



写真12 旧230号線の道路標識



写真13 グラーベン(地溝)の前に立つ筆者



写真14 グラーベン(地溝)を説明する岡田先生



写真15 グラーベン(地溝)の前に立つ見学団一行



写真16 グラーベン(大地溝)の噴火口の脇に立つ岡田先生

している。日本から世界ジオパークネットワークに加盟申請を行う候補地域として、洞爺湖有珠山は糸魚川(「糸魚川静岡構造線」と「フォッサマグナ」を含む)、島原半島地域(雲仙普賢岳とその被災遺構と噴火遺跡を含む)と共に候補地域となっている。そう考えると、このような噴火遺構は正に宝物である。

写真 12 は噴火の地殻変動前は緩やかなり坂だった道路の際に立っていた道路標識である。これにより、ここが元々国道 230 号線であったことが分かる。階段状に連なった段差で火山による地殻変動の激しさが分かる。

写真 13 はグラブンの前に立つ筆者である。写真 14 はグラブンについて説明中の岡田先生、写真 15 は見学者一行である。写真 16 は噴火口脇に立つ岡田先生である。

万世閣(旅館)

夜は洞爺湖畔の万世閣に宿泊し、夕食をとりながら岡田先生と懇談した。写真 17, 18 は岡田先生を交えて万世閣で夕食を食べている時の様子である。

壮警町役場

10 月 21 日は朝から壮警町役場を訪れた。

写真 19 は壮警町役場で行った壮警町長の山中漢さんへのインタビューの様子である。臨時町議会開催のために、当初の予定より時間が短縮され、1 時間弱になってしまった。

インタビューでは町長が住民の総員避難を決断する際に何をどのように考えたのかについて話を聞いた。町長は前回の噴火や十勝岳・雲仙岳の噴火を参考に、行政が何をすべきかを真摯に考えて、色々な決断をしたそうである。

有珠山の噴火については、過去のそれぞれの噴火の際に、指導力を発揮して住民の避難を促し、被害を最小限にするのに貢献した人がいるのである。

たとえば 1910 年(明治 43 年)の大噴火の際は、地元室蘭警察署長の飯田誠一氏が前兆地震から噴火を察知し、有珠山から 12 キロメートル以内に住む住民に避難指示を出した。県や国が避難指示を出しているのではない。

2000 年の噴火の際も、岡田先生の助言で避難勧告・避難指示が出され、住民が無事に避難す



写真17 万世閣での夕食



写真18 万世閣の夕食での岡田先生と筆者



写真19 壮警町役場でのインタビュー

ることができたそうだ。

1977年火山遺構公園

壮瞥町役場を訪問した後、噴火の遺構の見学を続けた。

壮瞥町では、1977年の噴火の際の地殻変動によって崩れた鉄筋コンクリート3階建ての旧三恵病院とその周辺を“1977年火山遺構公園”として保存している（写真20）。ここは患者の数が約230人という規模の大きな精神病院だった。地殻変動の際の断層の真上に建っていたため、地殻変動に伴って、何ヶ月かかかってゆっくり建物が崩れたそうだ。その旧病院を撤去せずに公園にして、噴火災害を学ぶために保存している。本物の壊れたもので勉強できるなど他にない。その後この病院は洞爺湖の対岸に移転している。

金比羅火口災害遺構散策路

写真21は金比羅火口災害遺構散策路から洞爺湖温泉街を遠望したものである。写真左側の山が洞爺湖の中島である。洞爺湖温泉一帯には昔から温泉があったわけではなく、1910年の噴火によって温泉が出るようになり、その後町ができたそうだ。2000年の噴火の際は、この町の間近に噴火口（金比羅火口群）ができて、次々と噴火が起こったのである。その後火口から噴出した珍しい熱泥流が発生して国道の橋を押し流し、アパートや町営温泉浴場に被害を与えた。このときの熱泥流は温泉街まで到達せず、町の中心部は被害を免れたが、次に備えて泥流の流れを制御する大きな砂防ダムをここに作った。写真右に見えるのはそのときに被害を受けたアパートの一つで、噴火で起ったことを伝えるために砂防メモリアルパークとして保存したものである。元々は3棟建っていたが、これ以外は撤去したそうだ。

写真22は2000年の火口群を見上げる見学者一行である。

写真23は水が溜まった2000年の火口（通称“有君火口”）である。この火口には水が溜まっ



2008/10/21 撮影

写真20 噴火後の地盤の変動と地震で崩れた元精神病院の建物



2008/10/21 畑村撮影

写真21 洞爺湖温泉裏の噴火遺構公園内の砂防ダム



2008/10/21 畑村撮影

写真22 噴火遺構公園内で2000年の噴火口群を見上げる見学者一行



2008/10/21 畑村撮影

写真23 2000年の噴火口の一つ
(水が溜っているものも溜まっていないものもある.)



2008/10/21 撮影

写真24 2000年の噴火口の脇に佇む見学団の一行



2008/10/21畑村撮影

写真25 噴火遺構公園内の旧公衆温泉



2008/10/21畑村撮影

写真26 噴火遺構公園内にある泥流で流された道路鉄橋



2階角の傷は泥流で流された鉄橋がぶつかった跡.

2008/10/21畑村撮影

写真27 噴火遺構公園内に残されたアパート
噴石と熱泥流で使用不能に. 他のアパートは撤去された.



2階角の傷は泥流で流された鉄橋がぶつかった跡.

2008/10/21畑村撮影

写真28 熱泥流がたまったままのアパート2階
右端の傷は鉄橋がぶつかった跡.



2008/10/21撮影

写真29 昭和新山の前に立つ筆者



昭和新山

2008/10/21畑村撮影

写真30 大有珠山の山頂から見た昭和新山と洞爺湖

ているが、全ての火口に必ずしも水が溜まっているわけではない。また、ここの火口湖の水はきれいな青色をしていたが、火口湖の水はその成分によって色が違うようだ。写真 24 はその噴火口の脇に立っている見学者一行である。

写真 25 は噴火遺構公園内に保存されている旧町営温泉浴場である。中に熱泥流が入り込んでいた。

写真 26 は流された旧国道 230 号線の道路鉄橋である。流されてアパートにぶつかってアパートの壁を壊した後、ここで止まっていた。鉄橋は川を斜めに横切っていたので、斜めの鉄橋の桁の側面の防錆塗料がはげかけている。

写真 27, 28 は噴石と熱泥流で使用不能になったアパートで、この一棟だけ保存されている。壁の傷は道路鉄橋のぶつかった跡である。アパートの内部には流れ込んだ土砂がそのままに残されていた。このアパートの屋根は噴石によって穴がたくさん開いていた。

昭和新山

写真 29 は昭和新山で、1944 年の噴火の際にできた溶岩ドームである。現在この一帯は林になっているが、昭和新山ができるまでは畑だったが、昭和新山が下から突きあがってきて現在の山の形になったものである。昭和新山が形成される経過を記録した地元の郵便局長三松正夫氏がこの辺り一帯を保存するために私費で買取り、現在に至ったものだそうだ。本気で物事を進める人の力のすごさを感じた。

大有珠山

写真 30 は大有珠山山頂までロープウェイで上り、洞爺湖や昭和新山を見下ろして撮影した。

4. 学んだこと

有珠山火山防災マップ

図 3, 4 が住民に配布した有珠山火山防災マップ（ハザードマップ）の平成 14 年版である。

表には、まず過去の噴火と同規模の山頂噴火が起きた場合に火砕流・火砕サージ・噴石・降灰が予想される危険区域が描かれている。また、その場合に泥流に襲われる可能性のある区域の図がある。次に、山麓噴火が起こる可能性のある危険区域が描かれた図がある。それ以外に、過去の噴火や噴火の被害の写真が掲載されている。これだけのことが描いてあると、有珠山の噴火についていやでも立体像ができる。

裏側には、過去の噴火の際の被害状況を表した図や、有珠山の噴火史が書いてある。最近の 100 年間の噴火状況を見ると、約 30 年に 1 度噴火していることがわかる。さらに、有珠山の噴火の特徴や備えるべきこと、避難のポイントなどが書いてある。たとえば、日頃から考えておくべきことや、湖底で噴火が起こると津波が起こる可能性があることを知っておくべきこと、などが書かれている。

ここで大事なことは、この 1 枚の紙に噴火の歴史と将来の予測という時間軸が入っていることである。空間的には、風向きなどによって被害地域が変化する可能性があることや、過去の泥流が流れた地域、火砕流が走った地域が描かれている。さらに、一人一人がどうするべきか

という必要な対処方法が書いてある．時間軸を入れて将来起るであろう危険を皆が共有することが最も重要で，それが財産となるのだと思う．



図3 有珠山火山防災マップ

ハザードマップ

国土を様々な形で管理している人たちは，様々な災害や事故を想定して被害程度を予想したり危険区域を予想したりするなどをして，様々なハザードマップを作っている．ところが，これまでの日本ではそれを住民に知らせると徒に不安を煽ることになるからいけないとか，観光客の足が遠のく，土地の価格が下がる，などの理由で，それを住民に配布することによって知識を共有し，いざというときの心構えを作っていくことができずにいた．そのようなことをしているうちに事が起これば，死傷者が出たり，不必要に被害を受けたりする．そのことを強く主張し，住民にハザードマップを広め，有珠山の噴火について住民の啓発活動をしていたのが，岡田先生である．

日本では噴火に限らず，地震，洪水など，地域によって様々な災害が想定されるが，どこの役所も基本的にはハザードマップを持っているにも拘らず，住民は十分に知らされていない．東海地震に備えて作成した津波用のハザードマップを見せてもらう機会もあったし，洪水のハザードマップも見ることがある．最近は各地で住民にハザードマップを公開し始めているが，そのような活動が効果的に行われているところでは住民の意識がガラッと変わる．自分の住んでいるところにある危なさを考えに入れて物事を考えるようになる．避難訓練をやっても，以前なら皆が無視して他人事のように考えていたのが，皆がちゃんと参加するようになるそうだ．

有珠山では2000年の噴火の際に、岡田先生主導で根回しがなされ、官学民の連繋で住民に普及したハザードマップに従い、約1万6千人が避難している。これに反し、阪神大震災（1995年）のときの国の対応はまったくひどかった。発生から4時間後には自衛隊は救援に出動する準備を整えて待ち構えていたにも拘らず、国が出動許可を出さなかったために初動が遅れてしまった。これは時の村山首相が社会党だったためだと考えられる。国土と国民を守るのが国の最も重要な仕事であるにも拘らず、それをやろうとしないというのは一体どういうことだろうと思う。このときのことを国は非常に反省し、2000年の有珠山噴火の際は、総務省から最終判断や決定権等の権限を持った人材が噴火前には有珠山に到着し、国の現地対策本部を立ち上げていたそうだ。

一方、気象庁の対応はどうかといえば、噴火の前兆地震がこれだけ発生しているのだから噴火が起るに決まっているといっても、気象庁としてはじめに発表したのは“火山観測情報”だった。次に注意報レベルの“臨時火山情報”を出して、噴火への注意喚起を呼びかけた。最後に噴火2日前に気象庁史上初めて“緊急火山情報”という警報を出したのだが、気象庁は警報を出すことをなかなか決断できなかったそうだ。当時迄の気象庁は長年の間避難などの社会対応には関与しない立場を続けていたのだから、判断できないのは仕方がないとも考えられるが、いずれにせよ、これは個人の責任というより、文化自体が未熟なのだと考えなければならない。

そのときに岡田先生が一番大事なことをやったのである。

岡田先生は元々プレートテクニクスの研究をやっていた。その後、北海道大学の有珠火山観測所に移って有珠山の研究をするようになった。21年間ここにいたそうだ。岡田先生はいつも赤いヘルメットをかぶってこの周辺を見て回っているそうだが、住民は赤いヘルメットを見ると岡田先生だと分かるのだそうだ。

岡田先生はハザードマップを作ったり、住民にハザードマップを周知する活動を行ったり、噴火に関する啓蒙活動を行ったりしており、このような活動を通じて住民に信用されていた。また、有珠山について価値の共有ができていたために、いざというときにその助言に従い、町は避難指示を出すことが可能だったし、また住民もその指示に従い避難することができたのである。

国は縦割り行政でやるから、なかなか決断しないし、非常にとろい。何が起っているのかを見ているにも拘らず、噴火が確実かどうか分からないから避難指示は出せないと、最後までもめたらしい。国は最終責任がどうなると言われたり、予測が外れたときのことを考えるために、最後まで命令が出せない。

三宅島の噴火の際も、結果的にはうまくいったが、数時間の差で何とか間に合ったという状態だった。本当はここ有珠山でもそれに近いことが前回の噴火で起こっていた。有珠山が噴火する数時間前まで、周囲はそんなことは考えていないため、観光の種にしようとして前兆地震が続く中で火祭りを強行していたという。その教訓が2000年噴火で生かされ、町長の避難指示で、皆が無事避難することができたのである。

岡田先生の頭の中

2日間の見学中に岡田先生から色々な話を聞いて、次のようなことを強く感じた。岡田先生は

有珠山という山について、3次元の立体像だけでなく時間軸も加えて考えており、山が生きて動いているモデルを非常に正確に持っている。そしてどのような現象にはどんな要素とどんな要素が関連しているかということを知り尽くしているので、発生している現象を立体的に捉え、そこから逆算して次に起る現象を頭の中に組み立てることが可能なのである。

“科学的理解”という点でたたら製鉄の木原明氏と全く同じだと感じた。作業中の木原氏に話を聞くと、彼の頭の中には透明な炉があり、その中で砂鉄や炭、鋼が生き物のように動いている様子が浮かんでいることがわかる。また、木原氏は炉から立ち上る炎の色と形を見て、炉が息づいていると考えていた。一方、岡田先生の頭の中では有珠山が生き物だった。有珠山が30年に一度くしゃみ（咳？）をするとでも思っているのかもしれない。その前に起る前兆地震も生き物で類推しているのではないかと思った。

さらに岡田先生は、有珠山の噴火について住民が何をどのように考えるべきか、行政はどう動くべきかについても考えていた。そして科学者たる自分がどうすべきかについても考えており、それを実行に移したのが2000年の噴火の際だったといえよう。

有珠山の噴火の周期と人の寿命

事故が起ってから30年経つと事故が忘れられ、人の注意がそこには向かなくなるために失敗が繰り返される。この“失敗の周期は30年”という失敗学の法則はこの火山の噴火についてもあてはまる。30年も噴火が起らないとこの火山は活動を休止したのかもしれないという考えが頭を持ち上げてくるのである。

この法則が典型的に出たのが阪神大震災である。神戸のあたりは地震がないから安心だと住民は考えていたのが、大間違いだったのである。勝手に抱いた幻想だったのである。だが、これが人間の特性だといえよう。

60年周期で発生する事象は忘れられてしまう。たとえば60~70年周期とか、200~300年を周期に襲ってくる津波はいつしか忘れられ、津波を無視した生活になってしまう。

東京も同じである。関東大地震は100年とか、70年周期説が最も有力だと一時考えられていたが、関東大震災（1923年）から既に70年以上が経過したのにいまだに起らないからである。抽象的に地震があったら大変だ、防災が大事だと言っているが、訓練をやっても皆が参加するわけでもない。今直接自分に関わりがあることとは思っていないからである。このような反応は周期性と密接に絡んでいるのである。一番危なくなっていると思うべきである。

有珠山は1663年、1769年、1822年、1853年、1910年、1944年、1977年、2000年に噴火している。1900年以降最近100年間の噴火は35~6年周期である。したがって、有珠山は噴火するという記憶が人々の中にかろうじて残る。また、噴火を経験している世代の人々が生きており、話が語り継がれ得るのである。ハザードマップを公表したときに、1977年の噴火を経験した人々がいて、話が語り継がれていたために、住民側にも受入れの素地があったといえよう。

1910年の噴火の際は室蘭の警察署長が避難指示を出した。1977年の噴火は大規模なものであったにもかかわらず、行政は対応が遅れ、噴火後に緊急避難を行い、人的被害が泥流による死者3人だけというのは幸運というべきものであった。過去の噴火に学ぶべきものを学んでいない。

人の関係の重要性

岡田先生はもともと北海道大学理学部で「地震学」を専攻し、中でもプレートテクニクスに興味があって、「火山学」をやるつもりはなかったそうだ。それが火山学の方向に進んだのは、アメリカ留学を終えて帰国した後で、1977年の有珠山の噴火でお手伝いに駆けつけ、大噴煙を目の当たりにして以来だそうだ。火山の噴火予知の研究に取り組み、1987年に北大有珠火山観測所の所長になった。自分が責任者になって最初に遭遇したのが1988～89年の十勝岳の噴火だそうだ。この噴火を契機に火山の災害をいかに最小限にするかということをテーマに活動するようになったとの事である。被害を最小限に抑えるためにフィールドワークを丁寧に行う傍ら、住民の啓蒙、ハザードマップの作成と住民への周知などの活動を地道に行ったそうだ。住民もはじめのうちはハザードマップを受け入れようとはしなかったが、次第にそれを受け入れるようになり、それが実際の噴火の際に役立ったのである。

地元が好きで、地元において活動しているから信用され、だからこそ皆を避難させることができたのだと思う。

3 現（現地・現物・現人）の大切さ

“現地”はもちろん“有珠山”，“現物”として“噴気”，“熱い地面”や“火口”などを見学した。現人には岡田先生，山中町長，案内・手配してくれた私の東大時代の教え子がそれにあたる。

彼は以前から無人化機械（パワーショベル）の開発に携わっており、2000年の噴火直後に熱泥流の被害を最小化するための無人化施工のために有珠山に来ていた。このような危険な場所で作業しているとき、そこに岡田先生が来ると神様が来たような気がすると言っていた。もちろん、彼だけでなく皆が岡田先生がいれば安心と思うそうだ。危険が迫れば的確な判断をして皆に伝えてくれるのがわかっているからだ。

有珠山では“3現”が失われつつあるようだ。岡田先生が2007年3月に定年退官し、一時観測所には教授ポストがなくなり、助教授がここの責任者となったそうだ。これは組織の運用としては言ってみれば規模の縮小か格下げである。全ての判断をする大学教授がここにはいなくなるということである。観測データは札幌の北大に直結して送られているので問題ないということだが、現地に人がいないために必ずまずくなるに違いない。大学の研究室にいてもデータを見ることはできるだろうが、足元が揺れ、異様な音を直接聞いている現場にいる人と同じ判断ができるだろうか。（2009年4月に新任教授が札幌キャンパスに着任している。）

火山の噴火という災害の被害を最小にしたいと思ったら、一山に一人を張り付けて、“山守”とでもいうような人を作るべきだろう。岡田先生は正に“有珠山の山守”だし、本人もその積りである。だからこそその言葉に重みがあり、住民や町もその言葉に従うのだ。

三宅島にはそういう人がいなかったから、判断がぬるくなり、間一髪で皆が助かったというような危険な事態になったのだ。

このようなことを考えると、次の噴火の時には失敗するのではないかと心配である。研究室にいる人が形式主義と数量主義で格好のいい事を言っている間に、本当に決断しなければならない時期に必要な判断が下せず、大きな被害が生じるのではないかと心配である。

情報発信

大災害を防ぐのはインターネットではないかと思うようになった。行政にも大学にも現地で見ている人がいなくなり、では誰も何も見ていないかというところではなく、きっと誰かが見ているに違いない。見ていた人がインターネットに何かの書き込みをすると、それがきっかけとなり、色々な情報を載せるサイトができるのではないか。そのようなサイトを運用すると、国や行政がやるのとは全く違うレベルの面白いものが出てくるのではないかと思う。ただし、このようなサイトの情報が“風評被害”に発展する危険性もはらんでいることを覚えておかなければならない。

阪神大震災で最も被害の大きかった JR 西日本の「六甲道」駅付近を 10 年後に歩いてみたが、そこには 30 階を超える超高層ビルが 2 本建って復興のシンボルとされ、その脇にある公園でお祭りをやっていた。これはバカげているとしか思えない。このような考え方でいる限り、同じようなことがまた起るに違いない。めちゃくちゃに壊れたものを保存するぐらいのことを考えるべきだ。超高層ビルを横に寝かしてみると、袋小路になっていて緊急避難できないことに気付くべきだ。私は東京オペラシティ 52 階に 7 年間事務所を構えていたが、このビルでは避難訓練をしても誰も参加していなかった。私は一度避難訓練に参加し、上から走り降りたことがあるが、6 分 30 秒かかった。しかし本当に走り降りたのは私一人だった。何千人がああビルで仕事をしているのか分からないが、本当に地震が来ればそれだけの人が階段に殺到する。そこで群集雪崩が起り、死傷する危険が非常に高い。“バカと技術屋は高いものを作りたがる”という法則通りに人間が高層建築を作ってしまうが、あまりいいとは思えない。

以上